



恒例のアナキズムカレンダー 2018年版を刊行いたしました。テーマは「マフノ叛乱運動1000年」。「マフノ叛乱運動」(正式には「ウクライナ革命叛乱軍」、ロシア語で「マフノフシチナ」)は、1918年から1921年まで、ネストル・マフノがボルシェヴィキ(赤軍)、白軍(デニキン軍・ウランゲリ軍)、民族主義者(ペトリューラ軍)といったあらゆる抑圧者に対して労働者の自由のための闘争を展開した総称です。

運動の原動力は、マフノというカリスマ性ある人物にあるのではなく、自管理というアナキズム思想に基づいていました。今回は図版だけではなく、マフノ軍による実際のアピール文なども多く掲載し、マフノ運動の思想を辿れるようにしました。紙面の都合で掲載できなかったマフノ軍の文章は次ページに掲載します。



# 文献センター通信

第 41 号  
2017年12月25日  
一部 100円

---

## アナキズムカレンダー発売!

### 2018年版は「マフノ叛乱運動1000年」

主な内容

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭	1
大杉栄らの墓誌ができるまで	2
追跡・「新居格」文庫	3
新刊紹介(拡大版)	4
サークルA(東京)の例会報告	6
連載 脱原発・裁判の現場	7

【2018年版 各月内容】

- ◎ 1月 || グリヤイボレのアナルコ・コミュニティグループ写真
- ◎ 2月 || マフノ軍の共同アピール他
- ◎ 3月 || ウクライナ革命叛乱軍(マフノ叛乱軍)の兵士たち写真
- ◎ 4月 || ピョートル・アルシノフ『マフノ運動史』より他(下図参照)
- ◎ 5月 || マフノ運動参照図(石川三郎により日本語版他)
- ◎ 6月 || 赤軍司令官パヴェル・ドゥイペンとマフノ写真
- ◎ 7月 || マフノとその一党/岡本潤(詩)
- ◎ 8月 || マフノ軍声明「同胞殺しを打倒せよ!」
- ◎ 9月 || マフノ軍宣言「叛乱軍(マフノ叛乱軍)文化教育部門」
- ◎ 10月 || ピョートル・アルシノフ『マフノ運動史』より他
- ◎ 11月 || 大杉栄「無政府主義將軍ネストル・マフノ」より他
- ◎ 12月 || 初期のマフノ軍のピラより他
- ◎ 巻末 || 「マフノ叛乱運動について」マフノ叛乱運動の概略
- 【仕様】 A4サイズ、28ページ、頒価 一二〇〇円(会員頒価一〇〇〇円)
- 【取扱店舗】 イレギュラー・リズム・アサイラム(新宿)、模索舎(新宿)、古書りぶるりべる(神保町)、水曜文庫(静岡)、三月書房(京都) ほか
- 【購入方法】 委託販売店 03-33352-6916 (イレギュラー・リズム・アサイラム 13時-20時※月水除く)
- ◎ 会員価格での購入ご希望の方は contact@cira-japan.net まで。

## ウクライナの農民と労働者へ「マフノ叛乱軍」

森川真人訳

英訳原文は、<http://nestomakhno.info/english/peasants-workers.htm>

農民と労働者の同胞たち！三年にわたり、諸君は資本主義との闘争を行ってきた。諸君の活動に感謝する。君たちの揺るぎなさどエネルギーのおかげで、この闘争も終わりに近づいている。革命の敵は君たちの攻撃でへとへとだ。勝利を予期して君たちは祝杯の準備をしていた。革命の敵との絶え間ない――

多くの場合不公平な――戦いの中、君たちは我々皆が手に入れようと奮闘していた自由ソヴィエト制度を實踐する機会を手に入れたと思った。しかし、諸君、君たちは自分の地域で誰が祝杯を挙げているか知っている。招かざる支配者たちが祝杯を挙げている。共産党の死刑執行人どもだ。奴らは、革命的蜂起を作り出している諸君の血で、諸君の息子・兄弟の血で一掃した公道に沿って地域にやってくる待機していた。奴らは国の富を掌握した。諸君ではなく、奴らが仕切っているのだ。農民・労働者諸君、君たちは彼らを目だけ支持している。諸君がいなければ、奴らは労働政府だと

自称できず、国家の殺人者・死刑執行人になることもせず、党の支配権の名において民衆に気ままに暴政を振るうこともできない。民衆の名が全権を彼らに与えているのだ。このためだけに、奴らは君たち農民・労働者が必要としているのである。

他の全ての場合、君たちは奴らにとつて何の価値もない。奴らは諸君の意見を絶対に考慮しない。諸君を奴隷にし、徴兵し、指図し、支配する。諸君を破壊しているのだ。抑圧された諸君は、共産党死刑執行人どもによる処刑・暴力・暴政の恐怖全てに我慢強く耐える。革命的正義、諸君による協同抗議行動――革命的叛乱――だけがこれらを廃絶できるのだ。このために、諸君は、同じように赤色殺人者の銃弾で死にかけている同胞たち――農民・労働者――に呼びかけられているのである。赤色殺人者どもは畜牛や穀物などの産物を力づくで奪い、ロシアに送っている。彼ら――君たちの親しい同胞たち――は、

自分の命に別れを告げ、我々皆が達成しようと努力している輝かしい未来全てに別れを告げ、革命・自由・独立を守るよう君たちに求めているのだ。覚えておきたまえ、農民・労働者の同胞たち。君たちが今完全な自由と独立を自ら経験していないのなら、今後、自分自身の運命を決めることなどできず、自分の幸せを築くこともできないだろう。自分の国の富や自分の労働の果実の所有者になることはないだろう。

これが、招かざる支配者――新参のポルシェヴィキ共産党――が諸君に行くことだ。これら招かざる主人と支配者から自分を救い出すためには、全ての農民階級とその最強のエネルギーを地域・地方の秘密農民大会を開催する活動に捧げねばならない。そして、この大会では、こうした山賊どもの無責任と独裁が惹起する目下の緊急問題を整理し、解決しなければならぬ。この国の利益のために、ウクライナ労働者の利益のために、これら招かざる主人と支配者どもがこの国を完全に破壊できなくさせようではないか。奴らやその金目当ての赤色殺人者、民衆を圧制する奴らの居場所はウクライナにはないはずだ。

一日も早く、全ての農民はその地域大会を通じて組織を作らねばならない。個々の村落や集落で地域戦闘部隊を組織しよう。優れた戦闘機関を創り出そう。

共産党死刑執行人・その金目当ての卑劣漢どもへの援助はきつぱり拒絶せよ。飼料も穀物もパンも与えてはならない。そして、労働者は、都市にいようが村落にいようが、共産党・チエカ・食料徴発部隊に参加してはならない。共産党の様々な機構への参加は全て止めねばならない。ウクライナ民衆は全世界に言葉と行為で次のように伝えねばならない。白色だろうが赤色だろうが殺人者と死刑執行人を追い払え！我々は万人の幸福・光明・真実に近づいている。お前らの暴力を許すわけにはいかないのだ。

国際労働者・農民の社会革命万歳！  
全ての白軍とコミッサールに死を、全ての死刑執行人に死を！  
自由ソヴィエト制度万歳！

ウクライナ革命叛乱軍

（マフノ叛乱軍）参謀

1920年3月4日

# 生まれ！読め！考えろ！〔マフノ叛乱軍〕

森川真人 訳

英訳原文は <http://nestomakho.info/english/redape2.htm>

赤軍にいる同志諸君！諸君はコミッサールと指揮官によって、マフノ叛乱軍を捕らえるべく送り込まれた。上官の命令に従い、君たちは平和な村落を破壊し、上官どもが人民の敵だと指摘した見ず知らずの人々を捜し、逮捕し、殺そうとしている。マフノ叛乱は山賊で反革命だと上官どもが諸君に伝えている。

奴らは諸君に言う。諸君に命令する。諸君に尋ねない。諸君を送り込む。そして、指導者の従順な奴隷のように、諸君は捕まえ、殺しに行くのだ。誰を？何のために？何故？

考えてみたまえ、同志の赤軍兵士たち！労働権力という感動的称号を勝ち取ったという新しい主人の陰謀に力づくで引きずり込まれた勤労農民・勤労者たちよ。考えてみたまえ。

我々、マフノ革命叛乱軍も赤軍にいる兄弟たちと同じく農民や労働者である。我々は弾圧に対して決起した。我々はいり良い、より輝かしい生活を求めて戦っ

ている。我々の公然たる理想は、寄生者もコミッサール官僚もいない非権威主義的な労働者の社会を成就させることである。目下の目標は、ボルシェヴィキ権力のない、どのようなものであれあらゆる政党からの圧力もない、自由ソヴェエト秩序の確立である。そのため、ボルシェヴィキ共産党政府は懲罰遠征隊を我々に送り込んでいる。奴

らは「デニキン・ポーランドの地主たち」その他白軍のカスどもと大急ぎで和解しようとしている。いかなる権威のくびきに対しても反抗し、抑圧された側のために決起している革命叛乱軍という民主運動を容易く破壊してしまおうというわけだ。

我々は白軍と赤軍の最高司令部など恐れはしない。暴力に対しては暴力で答えてやろう。必要であれば、少数の我々が、官僚的赤軍の大群を追い散らしてやろう。我々は自由を愛する革命叛乱軍であり、我々が守る大義は正しいからだ。

同志諸君！誰が君たちの味方で誰が敵なのか、考えてみたまえ。

奴隷になるな、人間であれ。

マフノ叛乱軍

1920年6月

## シンポジウム「ロシア革命一〇〇年」開催される

11月25日(午後2時～6時) 東京古書会館で40余名の参加者を得て開催された(同実行委主催)。討議内容は以下の通り。

【第一部】○村岡到(『フラタニティ』編集長)「日本におけるロシア革命像の変遷」○後藤彰信(初期社会主義研究会)「サンジカリストのロシア革命観」

【第二部】○久保隆(『アナキズム』誌編集委員)「アナ・ボル論争」に見るロシア革命像」○白仁成昭(『アナキズム』誌編集委員)「体制側から見たロシア革命の問題—1918年」出版されたロシア革命研究書」○森川真人(『アナキズム』誌編集委員)「マフノ叛乱運動の概要」○渡辺雅哉(スペイン現代史学会)「ロシア革命とスペイン／アンダルシアを揺るがした『ボルシェヴィ

キの3年間(1918-20)』

## 〈予告〉サークルA例会

1月20日(土) 午後4時から、於IRA、参加自由、会費なし。

テーマは「編集者・矢牧一宏のこと」(報告・川口)

\*以降2月10日、3月10日、4月14日(各第二土曜日)

\*前号で9月のテーマを「大杉の死」としましたが、正しくは「大杉の詩」でした。訂正とともにお詫びいたします。

## 「コスモス忌、盛況のうち」に第29回を迎える

10月21日(午後1時～5時) 築地本願寺の本堂講堂で90人超の参加のもと開催された。今回の第一部テーマは、「H氏肖像」「出獄の日のO氏」などで久板卯之助や大杉栄を描いた画家の林俊衛(一八九五～一九四五)の娘さんである「風紋」の林聖子さんの話で、題して「私が出会った人々」、森まゆみさんが聞き役をつとめた。第二部は恒例の懇親会。

## アナキズム文献センター 第四回総会 東京で開催さる

さる11月18日に2014年11月に

神戸で開催して以来、3年振りとなる総会を東京で開催しました。関西圏からお一人、他は東京・埼玉からの11名の参加となりました。

当日は、この3年間の活動報告や会計報告のほか、特に現状と今後（法人化等）についての報告がなされました（次頁）。

総会後は懇親会も開催され、久しぶりの再会を楽しみましたが、席上の話題から、情報発信について話題が及び、現在年4回発行の当センター通信を隔月刊行にするという方向性で今後検討することになりました。

### 《活動報告》

#### ■ 定期的活動 ■

▼運営委員会…東京で3ヶ月に1回、通信発送を兼ねて開催（新宿IRA）  
▼センター通信の発行…年4回（実送約200部）

▼ウェブサイトをツイッターの運営（昨年若くは世代にユーザーが多いツ

ィッターを試験的に開始）

▼アナキズムカレンダーの発行（300部）

#### ■ 個別活動 ■

▼書籍類整理および目録作成・アナキズムクラブの目録は2011年に終了、長谷川進文庫およびゲゼル文庫も終了。  
・大口の寄贈として完了しているのは平山、田代両氏からの寄贈書リスト。

・現在取り組んでいるのは、河西善治、近藤・白仁文庫の2つ。

・懸案として残っているのは山鹿文庫の目録化で、中断している。

※目録化された以外に写真・書簡など手つかずのものもある。

▼目録の初期入力およびデータベースの作成

現在一万余件の入力済み、その一部をウェブサイトに試行公開中（継続）。データの一本化を進めようとしているところ。

▼富士宮書庫の見学者受け入れ  
これまで龍さんにご対応いただいでい

た富士宮書庫の見学者に対して、本年11月から運営委員・古屋が対応するように。「書庫のどこにある」のわからない資料や機関紙・ビラ類の入力が終わっていないものもある。

#### 【今後の事業計画】

#### ▼ ビジュアルデータの収蔵

動画、静止画像（写真）、サウンド、電子資料などの収蔵に関して、資料そのものは多種にわたり集まっているものの、今のところ枠組みが決まっていない。ただ劣化のおそれがあるので、早急に対応したい。

▼蔵書目録の一本化と整理↓データベース作成

・山鹿文庫、河西文庫、近藤・白仁文庫の目録作成

・寄贈書単位で作成されているリストを一本化し、重複や記述の不備を整える必要がある。またデータ形式など長期的な視野で確定しておくことも求められている。

▼蔵書データベースの作成とセンター所蔵目録の公開

▼冊子の刊行

・寄贈書目録の刊行  
アナキストクラブ蔵書目録↓展示会を

開催したい  
山鹿文庫（データ入力中）↓目録作成  
蔵書の所在リスト

・アンソロジー本の刊行（来年から）手取りやすい読み物として、過去の資料・書籍からセレクトしたアンソロジー本を刊行し、商業ベースで販売する。選者もこれまでつながりがなかった方や女性などをお願いする。

\*予定内容…エマ・ゴールドマンなど

▼情報発信（通信+ウェブサイトをツイッター）

通信の読者が高齢化（固定化）している現状や更なる会員拡充のため、ウェブサイトを積極的に活用。コンテンツは、過去の通信やカレンダーなどのビジュアル資料をアップ。

\*ただし、ウェブサイトを中心にし、その記事の中から選んで通信を作る、というサイクルが理想的。

▼資料の充実

スイス・ローザンヌ視察で、（再び）アナキズムが注目された2000年代の国内資料があまりないことが判

明したため、ポスターを始めとするビジュアル資料を多く持つIRAと協力し、資料の保存・公開をしていく。

▼講座の取り組み

上記書籍の刊行や目録完成のタイミングでイベントを開催予定  
また、センター所蔵の映像資料など

の上映会も定期的に開催予定

【課題】

▼次期センター構想

○書庫の建設

○法人化の問題

○富士宮プロジェクト（通信35、39号

参照）

富士宮書庫に通いながら資料整理やデータベース化、資料紹介などの情報発信を積極的に進めていく予定。

○世代交代

2006年の（第3次）文献センター

発足以来、当初は10名以上いた運営委員も、年齢的なこともあり実働メンバーが徐々に減り、現在は実質的に3〜4名で運営しているのが現状。古屋が富士宮に転居して、今後は中心的な役割を担っていくつもりだが、それでも既に40代半ば。永続的なライブラリーにしていくためには、さらなる若い世代の参加を募らねばならない。  
\*なお、個別プロジェクト（例えば書

籍刊行の際の人力作業など）については、インターネット上でボランティアを募る方法も活用していきたい。

▼センターの運営費

現在は会費を中心に運営されているが、有料会員は80名ほど。今後の維持管理を考えると、（会費を中心にいくのであれば）さらなる会員の拡充が必要。前記のアンソロジー本の刊行を通じて、これまで届いていなかった若い世代を中心に広報をするほか、同本を会員特典としても活用し、会費の口数増加をめざしていく。また、書籍の販売やイベント開催、研究機関向け有料データベースなど、会費以外での収入手段も模索していきたい。

【現状と今後（要旨）】

▼現状

\*富士宮の書庫（8坪）は既に満杯であるため、一部資料を八街に移して作業スペースを確保し、現在に至る。追加資料は八街に収納している  
\*現在は運営委員および協力者の助力のもとに古屋、成田、奥沢が適宜、運営を担っている

＊2015年 土地を相続された新地主から退却する場合は母屋のみを残して他の3棟（自炊室・宿舍・書庫）は取り壊して欲しい旨の申し入れがあった  
＊2016年 古屋君が富士宮移転を表明（通信35号・富士宮プロジェクト）、今年5月に富士宮・猪之頭に移転  
\*龍夫妻が老齢化のため昨年8月より在京メンバーがふもとの家の清掃・整備をつづけている

▼今後

問題① 土地は借地であるからいずれ立ち退かなければならない  
問題② センターの継続性と法人化  
・2005年にポスト龍体制として法人化が浮上した折、その議論に参加した世代が現役から外れてきた。幸い古屋成田という若い世代（40代）が活動を支えているが、その先をどう展望していくのか

問題③ 公開に向けて  
・蔵書目録の作成  
・諸活動 センター通信／カレンダーその他  
・センターの利用は個々の要望に応じてできるだけ対応しているが、体制が整っていない訳ではない  
法人化案  
任意団体としての文献センター（現状のまま）  
+  
書庫そのものを一般財団法人として設立→センター資料を預り、保管、公開の事務処理を行う（要は別途、図書館を作る）

【論点】

① 文献センターの特質

運動としての側面と図書館としての側面を合わせもつ  
←  
こと  
←  
もの  
・「こと」は無形・一過性であって主催者に従う（要は休止すると無くなるだけ）、「もの」は残り、存在しつづける  
の」は残り、責任が残る  
② NPO法人解散の場合、人は類似法人に移す。一般財団法人から資料センターから資料  
③ 同家の根拠  
の側面と文庫館としての側面と文庫館としての側面と文庫館ではないかとの目  
④ 同家は「ア  
いよりオーブ  
センター以外  
から受入れる  
の向上となる  
文庫」寄贈の希  
⑤ 同家は財  
済的基盤の確  
に文献センター  
となる。従  
センターの活動  
当し、次回総会  
をつける

永続性をもち、法人を支える人の継続は必要で、結局は人の問題となる。

# 大都会門司港から温故知新〔1〕

## 昭和三十三年市場に「謎の店」出現？ 米澤豪

へ金波銀波の波越えて大波小波の波越えて着いた所が門司港（みなと）門司は九州の大都会…

（竹中芳・監修「日本禁歌集2」「バナちゃん」より一部抜粋。歌い手…博多淡海）

この歌詞は「バナナの叩き売り」の時に歌われている歌詞の一節で、現在と同じ歌詞はここまで。ここから先は1970年に「アングラ出版」として限定販売されたレコード「日本禁歌集」というタイトル通り「おおらかなエロチシズム」全開の「春歌」になっています。

「アナキズム文献センター通信」読者の皆さん初めまして。今回よりタイト



ル「大都会門司港から温故知新」を不定期に投稿します。北九州市門司港にある1950年代のアーケード市場「門司中央市場」に九州で2番目のインフォショップ（博多に以前あった「インフォショップ反転地」が最初）として去年8月6日にオープンした「INFOS HOP 大都会門司港」店主の米澤豪（よねざわごう）と申します。

皆さんは「門司港」という場所はご存知でしょうか？  
最初に紹介した「バナナの叩き売り」発祥の地として知っている方や「九州の玄関口」「レトロな街並」「焼きカレーが有名」として知っている方が多いと思います。歴史に詳しい人なら門司港は昔

「日本三大港」と言われていたことはご存知でしょうか。店名「大都会門司港」は大正時代に言われていた名称を頂戴して使用しているのですが、その当時の門司港は不夜城と言われるくらい煌々と明かりが灯っていたそうです。

出身が茨城で、親は東北出身なので

九州は何の縁もゆかりも無く、門司港については「対岸の下関は知っているけど、門司港は知らない」という認識でした。初めて来店する方から「何で門司港のこんな場所（門司中央市場）でお店を始めたの？」とよく質問されます。門司港に移住して2年半過ぎましたが、関東から九州へ移住する最初のきっかけは「ゲストハウスを将来運営したい人」を熊本で募集していたので、応募したのがきっかけでした。

2ヶ月の修行期間を条件に、卒業後はゲストハウスを1年以内に立ち上げるという目標を掲げ、初めての九州をぶらぶらしながら「物件探し」の旅に出ましたが、良い物件が見つかってもなかなか一歩踏み出せず、悩みながらぐるーっと一周したら九州の玄関口である門司港にきた、とお客さんには答えています。

門司港を知らないということは、当然ながら「門司中央市場」を知ることもなく、ふらっと入った市場のなかにあるカフェで、その当時の店長から声をかけられ、地元門司港の人を紹介されてから、あれよあれよという間に門司港へ移住することになり、住居が無い

人でも気楽にお店が出せる「住居付の市場」でお店を出すことになりました。「ゲストハウスを立ち上げる」という当初の目標は達成できませんでしたが、ゲストハウスのように、様々な人が訪れてワイワイガヤガヤしたりする場所や「世の中の流れにそう簡単には乗らないよ」というオルタナティブな場所が好きだったので、「インフォショップ」を立ち上げました。ですが、インフォショップとは名ばかりで、好き勝手なイベントを毎月いっぱい開催する「謎の店」として現在運営しています。

「門司は九州の大都会」博多淡海も歌った「バナナの叩き売り」は門司港を訪れる観光客向けのように？「安全無害な別の歌」に変わったのはなぜなのでしょう？ 門司港の「温故知新」をすることで「世の中の流れ」を考えようと思います。

「門司港を知らないということは、当然ながら「門司中央市場」を知ることもなく、ふらっと入った市場のなかにあるカフェで、その当時の店長から声をかけられ、地元門司港の人を紹介されてから、あれよあれよという間に門司港へ移住することになり、住居が無い



## 連載 (13) 自由人の日本史 I

## 静かな反逆

## 日本陽明学・中江藤樹

## 四〇〇年の水脈

武智 忍

日本陽明学の祖・中江藤樹が生まれたのは、一六〇八年（慶長一三年）。

琵琶湖の西岸、現・滋賀県高島市の小川村。

夕陽の沈む比良連峰の向こうが京都、福井である。

関ヶ原の合戦ですでに東西の決着はついてしたが、近江では大坂方に呼応した一揆も起こるなど、戦乱の余燼はくすぶり続けていた。

藤樹の父は、武士の殺戮を嫌って帰農した一人。

祖父は鳥取、米子藩の藩士だった。



日本陽明学の祖・中江藤樹

八歳の時、藤樹はその祖父に強く乞われて養子となり、故郷を離れて鳥取へ。さらに祖父の移封に従って四国、愛媛の大洲藩へ。

静かな村里で黙々と鍛をふるう父の背中を見ながら育った少年は、親の都合で「侍の子」となり、腰に刀を帯びて論語を学ぶという日常に急変した。

十三歳で祖母を、翌年に祖父を、たて続けに失うという逆境のなか、元服。やがて家督百石を相続。

「年譜」は、あわただしい藤樹の変転を告げるが、物静かな秀才の心の「戦争」には触れていない。

一六三三年、大洲藩内紛。二五年、近江の実父が死亡。一人残された母に大洲での同居を求め果たせず、空しく四国へ帰る船中で、激しい喘息の発作に襲われ昏倒。

ただ一人、煩悶を続けた藤樹がついに脱藩。母のいる近江に居を構えたのは一六三四年、二六歳の秋である。

\*

「藤樹は、時代の問題を、彼自身の問題と感じていた」

「戦国の生活体験の実りある意味合を捕えた、最初の思想家といえる」。

小林秀雄は、その著『本居宣長』（新潮社）のなかで、手放して藤樹を評価している。

儒学に二つの流れあり。（朱子学は）官学として形式化し、固定する傾向を生じたが、（藤樹を祖とする日本陽明学は）これに抗し、絶えず発明して、一般人の生きた教養となった。

藤樹が警戒した大洲藩からの討手は来なかつた。

村に落ち着いた彼は、一年後、居酒屋を始め、やがて刀を売った金をもとに米屋（貸米業）で生計を立て、私塾を開いた。

教えたのは儒教。人はどう生きるべきか……。つまり、倫理。

授業料はなし。対価を求めている教授は、学問の道に外れる。が、彼の信念。

藤樹の私塾は、連日多くの塾生でにぎわった。百姓、町人、近隣の大溝藩の藩士たち。さらに徳川幕府の身分制度を外れた非定住の民も……。

儒教は、あるいは学問は、支配階層の侍だけのものではない。

命がけの脱藩で幕制に刃向った藤樹は、私塾を開くことで社会制度に無言の抵抗を示した。

儒教には、日常語化されていない難解な概念、専門用語があるが、小林流に言えば、そんな解釈などどうでもよろしい。

朱子学は、知識を重んじ、秩序のなかに自己を調節する工夫。

対して藤樹の陽明学は、自己を閉じ込める外圧。秩序と闘い、突破するところに自己実現を見る行動学。

その根本となるのは、宗教色を帯びるほどに徹底した性善説だ。

\*

陽明学は「個人の尊厳と良心の命に従う権利を教える」学問であるがゆえに、ついには徳川幕府の圧迫を受けた。これが研究者の見方である。

藤樹の死後、二〇〇年。師の遺志を継ぐ、として大塩平八郎が決起。その五年後、農民・土川平兵衛が四万人の先頭に立ち「近江天保一揆」を成功させた。その後も乱は絶えず、一八六八年、戊辰戦争に至る。「知行合一」は維新の先駆者、吉田松陰。立役者、西郷隆盛らに引きつがれていった。

参考：「藤樹先生年譜」（藤樹頌徳会）  
『異形の聖人』大橋健二（現代書館）  
『天保の義賊』松好貞夫（岩波新書）

## 新刊紹介

“戦後はじめて杉並区民が選んだ区長はアナキスト!?”。

前号で文庫の存在について報告した新居格の『杉並区長日記―地方自治の先駆者・新居格』(復刻版)が刊行された。翻訳以外で買える唯一の新刊。

新居は、戦前アナキズム系の雑誌に数多く寄稿し、アナボル論争ではアナキズム陣営の先頭で評論活動を行う一方、協同組合の実践家としても活動。戦後は日本一の文化村を目指して杉並区の初代公選区長に就任し、政治・行政の旧弊打破に挑み、小地域からの民主主義を掲げたものの、健康面や議会・行政に失望してわずか1年で退任。この日記はその区長時代を記したものだ。ちなみに元版は、1955年に河合仁の学芸通信社から、遠藤斌編集で刊行



された『区長日記』。

今回、いわば忘れられた文筆家である新居を、地方自治・地方行政の視点から復権を試みた小松隆二氏による書き下ろし小伝「地方自治・地方行政の鑑 新居格の生涯と業績―典型的な自由人・アナキスト」と、当事者にしかわからない新居の知られざる一面を綴った大澤正道氏によるエッセイ「新居格と『世界の村』のことなど」の2編も収録されている。

●新居格著『杉並区長日記―地方自治の先駆者・新居格』虹霓社(コウゲイシヤ) B6判272頁 10月末既刊 定価1600円+税 ISBN07849909252-0-8 C0095(全国の書店で取り寄せ可能)

## 文献センターだより

○9月1日 新宿事務所にてセンター通信の発送作業。打ち合わせにて総会の日程など決める。

○10月3日 総会の開催告知のハガキを発送する。意外と面倒な作業で、日程は通信で告知するに限ると痛感。

○10月14日 八街の書庫見学会。人名

事典の編集委員会では現在、付録に予定している戦後の機関紙誌リストの調査をしている。八街の書庫や資料はどうなっているのかが話題となり、見学することになった。当日は都合のつかない2名を除く3名が参加。(奥沢)

○10月27日 カレンダー製作作業の追い込み。デザイン担当成田さんからは今年もかつこいいデザインが届いており、あとはテキスト作業。マフノ運動の全体像がかなり複雑ゆえ、森川さんの訳文や書籍とにらめっこしながら、なんとか巻末文章を書き上げる。

○10月21日 久しぶりにコスモス忌に参加。懐かしい方々と再会。「カレンダーはいつ頃出るの?」などと声をかけてくれる人もあつて嬉しい。

○11月1日 人名事典編集委員のTさんが、前述の機関紙誌リストの調査で来宮。書庫でいろいろと探したところ、幾つかの新発見あり。

○11月4日 奥沢さん、増山さんがふもとの家に。私は中庭にずっと放置されていた多くの切り枝を新ストープ用に自宅まで運ぶ。

○11月16日 総会の準備に大わらわ。特に会計報告に追われる(ただ、作業

を放置していただけなのだが)。総会が3年に1回なので、3年分をまとめるのが億劫。かと言って毎年よりは良いが。しかし、総会のおかげでカレンダーがいつになく早く発行できたのは思わぬ副産物。毎年これくらいの時期に発行したいものである。来年のテーマは何にしよう…。

○11月18日 総会当日。あいにくの小雨だが、それ以上の“寒さ”は思ったよりも参加者が少なかつたこと。でもまあ、ただの総会だけでは無理もないか。講演などイベントを合わせた企画をする必要があるなど反省。だからこそ、参加してくださった皆さまには本当に感謝。(古屋)

## アナキズム文献センター通信第41号

発行/2017年12月25日

発行所/アナキズム文献センター

編集/運営委員会

連絡先/〒160-0022 東京

都新宿区新宿1-30-12 302

郵便振替口座/

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール/contact@cira-japana.net

定価/一部100円